

## 原告 C h i c o . 意見陳述

2025年6月23日

いま、日本の政治の風景が、変わりつつあります。

一昨年、兵庫県芦屋市では 26 歳の若者が市長に当選し史上最年少を更新。前回の衆院選では、25 歳の議員が最年少で当選。女性候補者も過去最多を記録するなど、これまで中高年男性ばかりの同質性高い議会から、様々な人々が、国民の代表として集い、議論する。そんな、本来あるべき民主主義の姿が、今改めて少しずつ形作られているように感じます。

有権者が新たな担い手として託した切なる願いの連鎖に、少しずつしかし確実に広がるこの社会のうねりに、私は生まれて初めて小さな希望を感じています。けれど、社会の変化のスピードが、あまりにも遅すぎる。この遅すぎる変化が、私たち若い世代の日々の暮らしを、未来を、圧迫し続けています。

私は、2000 年、九州の家父長的な価値観が根強い地域に生まれました。学級委員長になることや国や学校の代表として海外留学や派遣に参加するたびに、リーダーシップを取るたびに、「女のくせに、目立ちたがり。生意気。」と揶揄され、進路選択や生き方でさえ、生まれた性別で線引きをされ、圧力や制限をかけられる、とにかく息苦しい日々でした。

ジェンダー平等を掲げる法整備が動き出し、「女性が輝く社会」というスローガンが掲げられたのは私が 3 歳だった頃です。しかし、その言葉とは裏腹に、氷河期世代にあたる私の母や親戚、同級生の母親たちの多くは非正規雇用のまま、景気が悪くなると真っ先に切られる不安定な雇用の中で、仕事も子育てもを一身に背負い必

死に過ごしてきました。そんな母の背中を見ながら育った私が、「女性が輝く社会」というスローガンを掲げた同じ口で女性蔑視やセクハラ発言を発して問題になる数々の中高齢男性の議員たちを、またネクタイスーツの男性議員たちばかりの議会をテレビで見て、「私の声は社会に届く」と一体どうしたら思えるでしょうか。表面的な法制度が整っても、議会に私たちのリアルが届かない限り、私たちが暮らす日々は、現実是不変なのだと思います。

2017 年。高校 3 年生だった私は進学と自己実現のため上京を決意しました。しかしその直後、日本にも#MeToo 運動が広がりました。これから社会に出ようと希望を胸に抱いていた私は、相次ぐ社会的に力をもつ男性から女性への性暴力の実態に、これが私たちを待ち受ける社会なのかと、強い怒りと恐怖を感じました。しかし同時に、連帯し声を上げる女性たちの姿に希望の光を見ました。声をあげることが、社会を変える第一歩であること。そしてその声が届くことで、確かに社会のルールや価値観がアップデートされていくこと。これこそが現実を変える力なのだと、痛感しました。

そして今日。縮まらないジェンダーギャップ。いつまで不条理な給与格差に耐え、いつまで痴漢や性暴力に怯えなければならないのでしょうか。今年発表された日本のジェンダーギャップ指数は、世界 148 カ国中 118 位。私が生まれた 2000 年代の順位と、ほぼ変わっていません。特に政治分野は、世界的には後退しています。ある試算では、完全な男女平等が実現するのは 123 年後とも言われています。つまり、私たちの世代だけでなく、次の世代も、そのまた次の世代も、この不平等を背負い続けるということです。この生きづらさや閉塞感は、もう私たちで最後にしたい。私たちの世代で、この不条理を終わらせたいと強く願っています。だからこそ、今、私たち自身が声を上げ、社会を変えていく権利が必要です。

他にも、環境問題や、軍事の拡大や世界の分断、若者の貧困。将来にのしかかる社会保障費、奨学金の返済など経済的不安の日々。私たち若い世代は、その影響を真っ先に受ける世代であり、だからこそ誰よりも未来への当事者意識があります。

しかし、国のルールや日本の未来を決める場に、私たちの声は届きません。私たちの暮らしが見えていない人たちによって、私たちの未来が決められていく。それが、いまの日本社会の姿だと思います。

私たち若者は、本当に、“思慮分別がない未熟者”なののでしょうか？

日々学び、働き、税を納め、投票する。私たちは、すでにこの社会の一員です。だからこそ、被選挙権という「声を上げ、ルールを変える権利」が、私たちに今必要です。社会のあり方を共に語る権利を、その自由と責任を、私たち若い世代にも切り開いてほしいのです。

何年待てば、私たちは主権者として認められるのでしょうか？

何年待てば、未来を語る場に加わる自由と責任を持てるのでしょうか？

この問いに正面から向き合えるのは、まさにいま、ここ裁判所です。

多様な人々が、それぞれの目を持ち、声をあげ、痛みに気づける議会になること、そんな日本の未来を作る同志として、ここにいる皆さんと共にこの問いを考えたい。ここから日本は変わっていける。私は、そう信じています。

以 上